

学会ニュース

..... ・ 第45号 2004年4月

目次

・ 第26回大会について	1
・ 森村敏己 共通論題・奢侈論について	2
・ 近藤和彦 英国18世紀学会（BSECS）年次大会に出席して	3
・ 事務局より	4

第26回大会について

今年度の第26回大会が、来る6月12日（土）、13日（日）に、南山大学（名古屋）で開催されます。開催校責任者は、中矢俊博会員です。詳細は同封いたしました大会プログラムをご覧ください。7名の会員が自由論題で発表され、また共通論題「奢侈論」では4名の会員がご報告くださいます。例年以上の多彩な顔ぶれとなりましたので、多数の皆様の参加をお待ちしております。

共通論題・奢侈論について

森村敏己（一橋大学）

18世紀ヨーロッパでは「奢侈」をめぐる激しい論争が巻き起こった。いわゆる「奢侈論争」である。従来、奢侈はもっぱら批判の対象とされていた。富者とは施しというかたちで貧者に富を分配するよう神に命じられた存在であるとして、自己の快樂のために富を消費することを戒めたキリスト教の倫理観からも、また豊かな商業大国カルタゴを破ったローマや、享樂的なアテネに勝利したスパルタを参照しながら、古代共和制国家の質素・平等と公共精神を理想化する立場からも、個人的快樂の追求に過ぎない奢侈は許されないものだった。さらに衣服や装飾品といった外観が社会的な差異化機能の大きな部分を担っていた当時の社会では、平民の奢侈は貴族への挑戦、あるいは上位の身分の詐称に他ならず、社会秩序を乱す行為とされていた。加えて、重商主義的な貿易政策を取る国家にとっても高価な奢侈品の輸入が増大することは放置できない問題となっていた。17世紀の宗教、社会道徳、国家はいずれも奢侈批判という点で一致していたのである。17世紀は奢侈禁止法が最も多く発布された時代だが、そこには、道徳と身分秩序の維持、貿易黒字の確保という目的が見て取れる。こうした中で、「私悪すなわち

公益」を副題に掲げたマンドヴィルの『蜂の寓話』は奢侈擁護論の火蓋を切った作品として名高い。それまでの伝統的な議論に対抗しながら、富者による奢侈を「消費」という側面から捉えたマンドヴィルは、国内産業の育成、技術革新の推進力としてこれを位置づけ、議論の地平を大きく広げたといえる。

こういった観点から奢侈論争を経済思想の文脈で分析することはもちろん可能だし、現にそうした研究はこれまでも積み重ねられてきた。しかし、奢侈の問題は「道徳から経済へ」という流れだけでは説明しきれない多様な要素を含んでいる。近年、消費文化への関心を背景に、18世紀を「消費社会の成立期」として捉え、当時の思想・言説に加え、物質文化のありようも含めて考察する動きが盛んになっているが、奢侈論の研究も当然、こうした動向の影響を受けている。ウォリック大学が主催した **Luxury Project (1997-2001)** はその成果として2冊の論文集を公刊しているが、その目次を見るだけでも近年の奢侈論研究の射程の広がりには明らかだ。衣服、家具、装飾品、建築といった具体的な「モノ」とそれを支える技術から、伝統的に奢侈の担い手として批判論者によって非難・揶揄されてきた女性の表象の変遷、美意識や感性の変化までもが考察対象とされている。

もちろん、このような議論の拡大は思想史からのアプローチの必要性を否定するものではない。18世紀の人々は商業社会の成立という時代の変化を感じ、この新たな文明への対応を模索していた。そうした中、アジア産の香辛料や絹、陶磁器といった従来の奢侈品に留まらず、コーヒーや砂糖を中心とする植民地産品が大量に流れ込み、ヨーロッパ社会に浸透していく。また、高価な輸入品に刺激されるかたちで、各国で技術改良と新しい製造品の開発が活発になる。このような変化を受けて、奢侈という概念もまた変容せざるを得ない。かつてのように王侯・貴族を中心としたまばゆいばかりの豪奢から、商品流通の拡大と技術革新が生み出す日用品に近いささやかな贅沢まで、その幅は広がり、各階層はそれぞれのライフスタイル、富、価値観に合わせて豊富なヴァリエーションをもつ品々の中から自分にとっての奢侈品を選び、楽しむようになっていく。こうした状況の下では、もはや奢侈一般を道徳的腐敗の原因、あるいは社会秩序攪乱の要因として退ける議論は色褪せたものにならざるを得ない。そのため、奢侈を擁護するにせよ、批判するにせよ、論者は自分たちが新しいタイプの社会の到来を目の当たりにしているという自覚をもちながら、議論を組み立てることを余儀なくされる。その結果、奢侈論は文明論の様相を帯びることになる。そこでは、宗教道徳と世俗道徳の乖離、欲望の解放の是非、貿易政策と国内産業の育成、植民地といった問題が議論されることはもちろんだが、それ以外にも、日常生活における「快適さ」、「社交」、「洗練」といった概念が重要な役割を果たすようになっていく。こうした流れは「道徳から経済へ」という変化であるよりもむしろ、宗教と身分制に立脚し、それを維持しようとする道徳から、新たな道徳への移行として理解する方が正確だろう。

それだけに、奢侈を批判する議論も経済の比重が拡大するにつれて一方的に説得力を失っていったという見方は当たらない。経済は確かに無視できない重要性を帯びるようになった。しかし、自分たちの時代が変化のただ中にあると自覚していた18世紀の人々にとって、奢侈論の射程はこうした変化全体の意味を問う、極めて広い範囲に及ぶものだったことを忘れてはならない。

今回の共通論題では、イタリア、スコットランド、フランスといったヨーロッパ諸国だけでなく、江戸期の日本をも視野に入れながら、多彩なテーマを扱うことで、奢侈論の広がり的一端を明らかにしたい。18世紀という時代が経験した多方面に渡る変化を一望できるようなテーマを設定することは難しい。それでも、奢侈論が多くの会員の関心に応えるものであり、また、報告者やコーディネーターが予期していなかった問題がフロアーから提起されることを期待したい。

英国18世紀学会 (British Society for Eighteenth Century Studies) は、国際18世紀学会の構成組織で、British Journal of Eighteenth Century Studies を年2回刊行し、年次大会を1月に開いている。ウェブページは www.bsecs.org.uk である。2004年の大会は1月3日(土)～5日(月)にオクスフォード大学聖ヒューズ学寮で開かれた。オクスフォード滞在中のわたしも出席してみたが、3つの全体講演、1つの合同セミナー、そして73の部会 (panel) が組織され、出版社の展示や室内楽などもあり、盛況であった。出版社 Gale Thomson による18世紀に英語で刊行された出版物すべてをデジタル情報として公開するプロジェクト (ECCO) についてのデモンストレーションもあった。

大学のクリスマス休業中に催される学会で、かつ学寮への泊まり込みを前提としていることも関係するのだろうか、アメリカ・フランスなど海外からの参加も少なくなかった。アメリカの積極的な関与は、部会報告者の顔ぶれにも、また米国18世紀学会と英国18世紀学会の合同セミナー (ASECS-BSECS Seminar) としてテリ・キャスル (スタンフォード大学) が「ジャズ時代のロココー—1920年代の18世紀像」と題する報告をおこない、これにペギ・レノルズとペニ・コーフィールドがコメントを加えるセッションが設けられたことにも現れている。フランスの積極性は、月曜午前にオクスフォード市内の、学寮からすこし離れた所にあるメゾン・フランセーズで別個にフランスの部 (French Caucus) をもつ、という形で表現された。そのフランスの部の全体講演は、デイヴィッド・アダムズによる「フランス革命期の衣装と政治権威」であった。

あと2つの全体講演は、デイヴィッド・フェアラ「経験主義のエロス」(土曜)、リチャード・クレイ「表徴の転換—革命期パリにおける偶像破壊と空間のコード」(日曜)であった。

部会のうち、とくにわたしの関心を惹いたものは「政治の文化」、「ポープとそのサークル」であった。1980年代からジャコバイトの発掘はさかんにおこなわれ、名誉革命後、とりわけ1701年の法律により王位継承権を剥奪されたジェイムズ2世とその直系卑属を支持し、その復辟をねがうジャコバイトにかかわる心情、民衆文化、図像、そして地域政治とディアスポラの研究は定着した観がある。

じつは、この英国18世紀学会においても、歴史を専門とする人は多数派とはいえない。文学・美術・音楽・思想・フェミニズム・オリエンタリズムの観点から18世紀にかかわる人が多いようだ。いずれの場合も、18世紀への関心は広まり深まっており、英国18世紀学会が開放的な方針をとっているのも、研究発表者のなかには、大学・学校の外で余暇に研究を深めている人も少なくなかった。日本における江戸学にも比せられるかもしれない。残念ながらオクスフォード大学の歴史学部では、大会の前にも後にもこの学会のことは話題にならなかった！ ただマンチェスター大学を定年前に辞した政治史の泰斗フランク・オゴーマンに会長就任を要請し、またロンドン大学のペニ・コーフィールドにセミナーのコメントを依頼したのは一種の戦略的配慮による、という複数の人の意見を耳にした。オゴーマンは『長い18世紀のブリテン』の著者であり、コーフィールドは『思想』873号のインタビュー「ロンドン／都市史／新しい歴史学」で述べられているように、18世紀の都市・社会・文化研究の中心的存在である。

事務局より

前号学会ニュースの訂正

学会ニュース44号に掲載されました安室可奈子著のエッセーに関連して、著者より以下の通りの訂正とお知らせの連絡がありましたので、お伝えいたします。

○5ページ（Iのf）で紹介した、木村三郎氏の「西洋近代美術史と図像学の部屋：インターネットによる西洋美術史情報の検索」にて、ホームページアドレスが抜けておりました。お詫びして訂正いたします。

URL <http://homepage3.nifty.com/saburo-kimura/TOP.htm>

○ニュースレター掲載のリンク集を、安室のホームページにも公開いたしました。是非ご活用下さい。URL <http://homepage3.nifty.com/kohitujibon/>

会則改正について

昨年12月13日（土）の幹事会におきまして、「日本18世紀学会会則」および「日本18世紀学会の役員選出に関する細則」の改正が議論されました。これは主として、現状と一致しない会則および細則を現状に即したものにすることを目指したものです。改正には総会における承認が必要とされます。現会則および細則、および会則案および細則案を同封いたしましたので、ご検討くださいますようお願いいたします。

現幹事会メンバー：安藤隆穂、安西信一(補充幹事：常任幹事・年報担当)、井田尚(補充幹事：常任幹事)、小田部胤久(常任幹事：会計担当)、川島慶子、木村三郎(補充幹事：常任幹事)、近藤和彦(補充幹事：常任幹事)、坂本達哉（常任幹事）、佐々木健一（代表幹事）、高橋博巳、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一、堀田誠三、増田真(常任幹事)、渡辺浩(補充幹事：常任幹事)

会計監査：中島ひかる 森村敏己

日本18世紀学会ニュース 第45号 2004年4月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 佐々木 健一
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室
e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp
fax: 03-5841-8958